

探 検 難 感

☆ 探 検 自 身

☆ 探検部自身と活動について

古 谷 精 宏

「探検」ということについて我々はたえず議論を重ねて来た。しかし、いつの時もはっきりした結論は出なかった。現在、探検について地理的探検と学術的探検の二つに別れているとしている。そしていつもこの二つを前提として話しを進め今や学術探検のみがこのされた探検であると言われている。果してそうであろうか。あるいは意味をとりちがえて考えているのではなからうか。

過去においてノルウェーの生んだ探検家アムゼンがフラム号で南極へ向い、英国のスコットに先だったこと約1ヶ月極点に達した彼はその外北磁極の発見や北極横断の快挙もなしとげたが、これらはすばらしい探検活動と言えるのではないだろうか。対称地域が完全な未踏なるをもって純粹の探検活動であったと言える。ヒマラヤ山系又しかりである。しかしながら現在行なわれている南極大陸での調査は果して探検と言えるであろうか。言葉を変えれば学術探検と言えるであろうかという問題である。私は「否」と答えたい。あれは学者による研究、観測そのものではないだろうか。私は学術探検とはある場所の民族学地質学、考古学 etc を調べるために道なきジャングルを進み、氷河を越えて行くその過程にあるのだと考えている。ある特定の場所で骨を調べ、地質を調べること自体は何んら探検と言えないのではなからうか。もちろん「探検」という言葉は観念的なものであり、新しい言葉のためにそのベースとなるものが無いと言う事で我々が「探検」という言葉の内容を広く深く作って行くことも良いわけであり又必要な事であるにちがいないが、「探検する」という言葉、さらに言うならば「探検する」というこの動詞の意味は辞書にもあるように危険を犯して実際に未知を探ることにあると書かれてある。したがって行動する場所が平地であれ、山岳であれ、海底であれ、地底であれ、未知なるものに踏みあとをのこすことであって、そこには測量や地質や生物を調べることが何んら「探検する」ことにはならないのではなからうか。

少し極論になりすぎたようであるが現在言われている（我が部が言っている）

学術探検は、学術探検の意味をとりちがえ、調査そのものが探検であるかのごとく錯覚をもって結論づけているのではないだろうか。したがって、私は「探検する」ということは我々のもっているバイオニア・スピリットの表れとして未知を探り開拓するための行動そのもの自体が探検であると言えるのである。しかしながら目を外に向けると現代の地球上に於て探検活動と言える地域があるだろうか、「皆無！」である。今や“月”のみが探検の対称として考えられている唯一のものであると思われる。宇宙以外に探検すべき場所がないとすれば地球上での探検活動は消えさる以外に無いのではなからうか……。

<関大探検部自身とその活動にふれて>

前項のごとく探検とは今や宇宙以外にその求める地域が無いとするならば、我々関西大学探検部の存在はともかくとして、我々の探検部活動そのものの意味はなくなってしまうのではないかという不安である。そのような意味においても部活動としての意味、あるいは意義を再検討してみなければならない時期でもあろう。

関西大学探検部日誌抄によれば昭和33年4月、探検部設立準備会が設立され、同年11月に探検部結成式が行なわれて活動が開始されたとある。そのころ我が部が当面の活動として取り上げたのは離島調査であった。これは将来の海外遠征のために一番適していると対象地域として離島が考えられ、離島5ヶ年計画を作成、北は礼文島調査から南は沖縄八重山群島調査に至って進められて行った。その調査内容は部の資料を見ればはっきりするが、いわゆる生活調査ともいべき島の総合調査であった。（但し地理的な事は省く）そして昭和35年、純粹の地理的探検をめざす技術研究会が部内で発足、山岳技術を中心として活動され、型の上で離島と山岳（学術探検と地理的探検）に分れて活動されるようになった。そして離島は先述のような活動対象をもって活動にあたり、山岳は北は知床半島から南は屋久島に至るまで、その間、北アルプスを中心に探検登山とトレーニングに山岳技術のみがいて地理的探検をめざして来たそのうち技術研究会から洞窟活動が学術探検をめざす離島班（辺境の調査も含む）からボート、アクマラングと、各、細合化したパートとして現在に至って

いるのである。

以上が我が部の設立以来のおおまかな歩みであるが、前項、探検自身を考えあわせると少々解しにくい点もあるが、それはその時の時代、状況にもより又、私自身、探検そのものと探検部という一つのサークルを同一視する必要はないし、探検部という一つのサークルにはそれ以外の部としての価値と、又、活動目的、意義もあることを自覚する必要があるのではなからうかと考える（“探検”そのものとしてでなく“探検部”として）、したがって各パートは各自少しでも探検活動に近ずいているという自覚でもって活動を行い、一つの部として対人関係を学び、言うならば一つの社会学、雑学を習得するようにしたい。幸いにして我が部に入部した者は全てバイオニアンたらんと欲する者の集まりであると信ずる。各パートで各パートなりに探検を考え少しでも探検らしい活動をより広く、より深くめざせば良いのではなからうか。サークルという一つの社会機構の一員であれば、その活動に社会性を持たせなければならないと考えれば調査記録の発表も又、当然必要になってくるであろう。

各パートが全て探検らしい活動をめざしていることを自覚し、探検部として発展しなくてはなるまい。

現在、我が部でいろいろと論争すべき論点はあるにしても一応の型は出来上がったと考えられるが、又今後も少々の変り変りはあつてしかるべきであり、それはそれで良いし、大いに意義ある活動であると考えている。

S 40.7.6

完

